

日本昔話「猿婿入」にみる女性の意志

千野美和子

I、初めに

主人公が、動物、精霊、妖怪など、人間以外の者との不思議な結婚をする昔話を異類婚姻譚という（稲田ら、1994）。主人公は男性の場合も女性の場合もあるが、男女どちらかによって、その出会い方や結末は異なる。また、この昔話は世界に広く分布しているが、出会い方や結末は、地域によって様々である。小澤(1994)は、人間と動物との婚姻の話を取り上げ、文芸学の立場から、世界の民族の異類婚の話と比較しながら、日本の昔話の特質、ひいては、日本人の基層をなす考え方について考察している。

本論文では、主人公の女性が異類である猿と結婚する日本昔話「猿婿入」を取り上げ、小澤の考察を踏まえながら、心理学的に考察する。まず、この昔話についてタイプと類話から昔話全体における位置を検討し、この昔話の特徴について考察する。次に、同じく女性が異類の男性と結婚するグリムメルヘンの異類婚を初め、日本や西洋の昔話を比較検討しながら、この昔話について心理学的に考察する。特に、この物語を通して、女性の心の在り方について考えていきたい。

昔話の研究は様々な領域で行なわれている。筆者は心理学の立場から、昔話には普遍的な心が表現されていると考えて、昔話から人間の心の在り方を学ぼうとするものである。方法論は、従来の昔話の深層心理学的な研究を基礎にしつつ、さまざまな昔話を比較することによって、昔話そのものから、心を読み取り探ろうとするものである。

II、昔話のあらすじ

昔話とは本来口承文芸の1つであり、その語り口の特徴がある（小澤、2005）が、ここでは、「猿婿入」の1つ「猿の婿どの」の筋を取りあげ、これを基に幾つかの類話を加えて、考察していく。

あるところに爺さんがいた。ある日、その爺さんが牛蒡掘りに行った。ところが、牛蒡が一つも掘れない

ものだから、どうしようかと思っていると、猿がやってきて、牛蒡を掘ってやろうかと言うので、掘ってくれたらおれの娘をどれか嫁にやろうと言った。そうすると、猿が「ほんとうにくれるかね。3日したらもらいに行くよ」と言った。爺さんはまさか猿が娘をもらいにくることもあるまいと思ったから「よしよし」と言った。ところが、そうこうしているうちに、猿が牛蒡を抜きだし、残らず掘ってしまった。そして、娘をもらいに行くよと言って逃げていった。

本当に猿が娘をもらいに来やしないかと心配になった爺さんは、「3人いる娘のうち誰が嫁に行ってくれるか、娘に相談してみよう」と思って、もどって来た。爺さんの頼みを1番目の娘も2番目の娘も、はねつけた。3番目の娘も同じように断わるだろうと思って相談したところ、娘は話をじっと聞いて考えていたが、「爺さん、そんなら私が猿の嫁に行きます」と言ったものだから爺さんはたいそう喜んだ。「私は親孝行とるので行きます。それと、3つの物をください」と言った。それは、とても重い臼ととても重い杵と米一斗だった。それをきいた爺さんはすぐ娘の頼んだ物を用意した。

それから3日たって、いよいよ猿が娘をもらいにやって来た。そうすると、娘は「お猿さん、お猿さん、私が嫁に行きます。それで、山に行ってから餅をついて食わねばならので、あんたが臼と杵と米をかついで行ってください」と言った。それで猿がかかえてみるとたいそう重かったが、嫁の言う事だから3つかたいで、山をどんどん登っていった。

ちょうど4月で、道の両側には桜の花がいっぱい咲いていた。それからずっと行くと大きな谷があって川が流れていた。そこに桜の枝が伸びてとても美しく咲いていた。すると、嫁が「猿さん、猿さん。あの桜の花はとても美しい。わたしに取って来てくれないかしら」と言った。これも嫁の言う事だと思って「よしよし」と言って、猿は木登りを始めた。「猿さん、猿さん。一番上のを取ってください。」と下から嫁が呼んだ。それで、猿がこの辺かと言うと、まだ上の方と言って、

だんだん上の細い枝になるまで登らせた。猿は背中に重いものを負っているし、枝は細いものだから、枝が折れて、深いふかい谷に落ちてしまった。そして、猿は谷の水の中にはまって、白の重みで沈みながら、歌を詠んで流れていった。それから3番目の娘は喜んで家に帰ったそうだ。

(関敬吾編『こぶとり爺さん・かちかち山 日本の昔ばなし (I)』より)

Ⅲ、この昔話のタイプについて

この昔話は、『日本昔話大成』では、「本格昔話」の中の、「婚姻・異類婚」の章の103「猿婿入」に分類される。関(1978)は、「この章には動物ならびに超自然的なもの人間女性との婚姻を主題とする話を一括する。」とし、「猿婿入」については「我が国では最も分布の広いものの1つである。蛇から猿への移行の過程を実証するのは容易ではないが、恐らくはこの昔話は蛇婿入譚の強い影響を、あるいはいま一步すすんでいうならばその変化した型ではないかと考えられる。発端は畑の耕作の援助者に娘を約束するというのが一般的であるが、幾つかの例では田の水をかけてくれたものといひ、かつまた針ないしは瓢箪のモチーフをもつものがある。(中略) 地域的には東日本においては嫁入りについて里帰りの餅をつけて行く途中で川に落ちると二段の過程を経ているが、西日本においては嫁入りの際に川に落ちることになっている。」と説明する。ここに取り上げた話は、後者のタイプになる。

また、稲田(1988)は、「猿婿入」を、「むかし語り」の「Ⅸ婚姻」<異類婚> 210A「猿婿入り一嫁入り型」210B「猿婿入り一里帰り型」210C「猿婿入り一火焼き娘型」の3つのサブタイプに分けている。

ここで取り上げた話は、210A「猿婿入り一嫁入り型」に分類される。このタイプは次のモチーフからなる。

1. 爺が畑を打っていると猿が現われ、三人娘の一人を嫁にしてくれるならてつだう、と言ひ、爺が承知するとすぐ畑を打ちかえす。
2. 爺が娘たちに頼むと、上の二人はことわるが末娘が承知し、鏡を用意して、迎えにきた猿に水瓶を背負わせて出かける。
3. 娘がわざと川に鏡を落とすと、拾おうとした猿は、

水瓶に水が入って、後家になる嫁がかわいい、と詠みながら流される。

4. 娘は家に帰り、幸せな結婚をする。

稲田(1988)は、「蛇婿入」を取り上げ、この話と比較している。すなわち、発端は類似しているが、「蛇婿入」が「水乞い」を代表的モチーフとするのに対し、このタイプは「畑打ち」などのてつだいがより多い、また、前者が人間に変身することを基本的性格として備えているのに対し、このタイプでは全く変身せず動物の姿態のままである。

「蛇婿入」は、稲田(1988)のタイプでは、タイプ205として「婚姻」の一番目に挙げられている。サブタイプが9つもあることから分かるように物語展開のバリエーションの多さや、関の上述の指摘にもあるように、「蛇婿入」は日本の「異類婚」の中でおそらく最も古い形であり、そのいくつかのタイプから、「猿婿入」が派生したと考えることができる。しかし、一方で、稲田が指摘しているように、「猿婿入」独自の特徴を持っていることも確かである。すなわち、蛇婿は人間に姿を変えることが一般的であるに対して、猿婿は人間と言葉を交わすが、物語の最初から最後まで人間に変わることなく動物の姿であり続ける。

また、タイプ210B「猿婿入り一里帰り型」は、モチーフの2. 3. がAとは異なる。

2. 爺が娘たちに頼むと、上の二人はことわるが末娘が承知し、猿に嫁入りする。
3. 里帰りに嫁が白ごと餅を背負って川ばたの桜の枝を折りに登らせると、枝が折れて猿は川に落ち、後家になる嫁がかわいい、と詠みながら流される。

そして、タイプ210C「猿婿入り一火焼き娘型」のモチーフは以下の通りである。

1. 爺が干あがった田に水を入れてくれた者に娘を嫁にやる、とひとりごとを言うと、現れた猿が水を入れる。
2. 爺が娘たちに頼むと、上二人はことわるが末娘が承知し、迎えにきた猿に水瓶を背負わし、出かける。
3. 娘がわざとかんざしを川に落すと、拾おうとした猿は水瓶に水が入って溺死する。
4. 娘は婆に変装して金持ちの火焼きにやとわれ、夜娘の姿にもどったところを見た息子にみそめ

られる。

5. 息子は恋わずらいになり、占い師のみたてで、息子が飯の給仕を受ける召し使いを嫁にもらうことになる。
6. 息子が最後に来た火焚き娘の飯を食べ、娘は嫁に迎えられる。

サブタイプAとBは、猿を亡き者にする時が、嫁入り時であるのか里帰り時であるかが、異なり、Cは、Aの「家に帰って幸せな結婚をする」という収束の形では終わらず、さらなる結婚に至るエピソードへと話が発展する。モチーフ1の発端は3つのサブタイプそれぞれの特徴はあるものの、同じバリエーションを持っている。猿を川に落す方法も、サブタイプに関係なく同じ幾つかのバリエーションがある。たとえば、ここにのせた物語は、タイプとしては、Aに属するが、モチーフの3では、タイプBになるなど、移動可能である。「蛇婿入り」のサブタイプと比較すると、205D「蛇婿入り—嫁入り型」、205E「蛇婿入り—姥皮型」が、それぞれ、「猿婿入り—嫁入り型」、「猿婿入り—火焚き娘型」に対応する。「猿婿入り—里帰り型」にそのまま対応するものはないが、結婚後里帰りをした話として、「蛇婿入り—娘変身型」がある。むしろ、「猿婿入り」と「蛇婿入り」の両者の違いを際立たせる話である。「猿婿入り—里帰り型」では、娘は結婚後里帰りの時を待って、猿を亡き者とする企てを立てるのに対して、「蛇婿入り—里帰り型」では、里帰りの時には逆に娘が蛇に変身している。

稲田は、このタイプについて対応するATのタイプはないが、参照タイプとして、タイプA,Bについては、AT312A「兄が虎から妹を救う」、タイプCについては、AT510「シンデレラといぐさ頭巾」をあげる。後者のタイプで、ATにおいて別タイプをあげたのは、「娘がその家の息子に見初められ、幸せな結婚をする」後半のエピソードを特徴としたためと思われる。

IV、類話からの検討

「猿婿入」は鹿児島県から青森県まで、広く分布している。タイプの違いによる地域の特徴が見られるが、ここでは、関(1978)が分布としてあげている類話から、この昔話の特徴を検討しておく。

1、モチーフ1について

モチーフ1は、なぜ娘が猿の嫁に行くことになったかの話の発端部分である。ここで取り上げた話のように、「牛蒡掘りを手伝う」など、畑を耕すところから、種を植える、草取り、そして収穫まで幅広い畑(田)の手伝いに関わるものが多い。また、田に水を引くというものもかなり多く、日照りや旱魃という天災を挙げているものから田の入り口の岩をのける、田の水番などをあげているものがある。山の住人である猿が山に近い畑の手伝いをするという本来の猿の属性に近いイメージをもつとともに、田の水を引くという「蛇婿入」の発端と同様の話も多く、物語の蛇から猿へ移行とともに、「水を司る」ことが猿のイメージにも内包されている。

これらの発端をまとめると、爺が困っていることや願っていることを猿がかなえる代わりに、娘が嫁に行くということになる。「爺と婆」のように両親が表現されることもあるが、ほとんどの場合は爺とのみ表現され、父が行為者となることがわかる。猿と爺のやり取りはさまざま、爺の方から「水をかけてくれたら、娘の一人をやる」と、この約束を持ちかける場合と、猿の方から「娘をくれたら水をあててやろう」と言う逆の場合がある。爺側の「猿が嫁をもらいに來ることもあるまいと思って承知する」などの不用意な面や、人間レベルでの手伝いの要求という面もある一方、日照りで田に水が涸れてどうしようもないときに、猿の人間を越えた力を借りるための代償としてそれに見合う価値としての「娘を嫁にやる」という話になることもある。たとえば、「猿が雨を降らすという。庄屋は旱魃つづきなので、いうとおりにするから降らせてくれという。雨が降り、猿は姫をくれという」。多くは対等の契約から生じた話であるが、不当な関係から生じた発端もある。たとえば「畑を荒らすので」、「堰をくずされるので」、「大水が出て猿の祟といわれる」ので、「娘を嫁入りさせる」、もっとストレートに「娘がほしいから田の水をからした」という表現のものもあり、この物語の奥に、自然の脅威に対して、娘を生け贄に差し出すいわゆる人身御供のエピソードを読み取ることができる。

2、モチーフ2と3について

モチーフ2の、爺が3人の娘に猿の嫁入りを頼み、

1番目と2番目の娘は拒否し、3番目の娘が承知するのは、ほとんどの類話で共通している。ここで述べられている物語は、父と3人の娘の関係であることが分かる。その際に、1番目の娘と2番目の娘の拒否の仕方を「悪態をついて断わる」と強調するもの、「姉娘二人は袋を下げて物乞いをして歩いても猿に嫁入らぬと答える」、あるいは「長女は便所蠅になってもいやだと断わる。次女はひき蛙になってもいやだと断わる」と具体的な表現を載せ、モチーフ4の結末に繋げるものもある。拒否する1番目と2番目の娘を対比させることによって、3番目の娘が嫁入りを多くはしぶしぶでなく積極的に承知したことが強調される。ここであげた物語のように、「親孝行と思うので嫁に行く」というように、父と3番目の娘の関係が表現されることもある。

モチーフ2と3の話の展開は、タイプAの嫁入り型とBの里帰り型では異なり、それにともない猿を亡き者にする手段も異なる。前者の手段として語られるのは、嫁入りの際に、猿に瓶や壺などを背負わせて、川や池に来たところで、娘が持っていた鏡、かんざし、くしなどを水の中に落とし、猿に拾わせる、あるいは、長いわらじを猿に履かせて、そのわらじを娘が踏んで川に落すものが多い。後者の手段として語られるのは、嫁入り後里帰りの際に、娘は餅をついて臼のまま猿に背負わせ、川沿いに咲いている桜や藤の花をほしがり、猿は花を取るために木の枝に登り、枝が折れて川に落ちてしまうものが多い。最終的に猿を死に至らせる方法は共通している。それは、猿を川や池に落とし、水から浮かび上がらないようにすることである。そのために猿に背負わせる瓶や壺や臼が重要な役目を果たしている。それらのものを猿に背負わせる理由として、後者の場合は里帰りに餅をついて実家に持っていくという合理的理由が語られ、臼を背負う理由もある程度納得のいく展開となっているが、前者の場合なぜ壺や瓶を背負うのかわからないまま話が展開する。逆に前者の合理的理由がないことがむしろその奥にある象徴性を窺わせる。

3番目の娘が猿を亡き者にする行為者であるだけでなく、ほとんどの場合、企画者でもある。つまり、嫁入りを承知し、嫁入りまたは里帰りの際に、猿に瓶や臼を背負わせて、猿を川に落すまでの行為を、人や動物や超自然の存在など、他者の援助無しに、女性主人

公が一人ですべてを行なっているのである。これも、この物語の大きな特徴と考えることができる。

3、モチーフ4、結末について

「家に帰って親孝行をする」、「爺と二人で安楽に暮らす」、「親子は仲良く暮らす」などの説明が入るものもあるが、娘が爺のもとに戻り、父と娘の生活が続くことを示す「家に帰る」という結末がほとんどである。モチーフ4の内容に取り上げられている「幸せな結婚をする」話は、家に帰った後に、「庄屋の耳に入り、娘はそこの嫁になる」、「金持ちの家にもられる」など幾つかあるが、モチーフ4はむしろ「家に帰る」のみの内容が主流を占めるようである。

また、爺の願いを聞き入れた3番目の娘が「田一段畑一段もらう」、「褒められる」だけでなく、父の願いを受け入れた末娘の結末と拒否した姉二人の結末を対比させて表現している話が幾つかある。モチーフ2とのつながりで、「末娘が長者の跡継ぎになり、姉二人は追い出されて物乞いをして歩く」、「長女は便所蠅、次女はひき蛙になってしまう。末娘は父親とともに暮らす」と述べるもの。モチーフ2では特に述べられないが、「娘は家に帰って後を継いだ。姉二人は鼠になって家を追いだされた」、「家に帰ると（目の不自由な）爺は目が見え、姉たちは猿になっている」のように、父の約束を受け入れる親孝行の娘と親不孝の娘という対比という形をとるもの。「爺は泣いて喜ぶが、姉たちは山の兄若衆が来たときと笑い、親不孝の罰で鼠になる」など嫁入りを拒否した姉たちに対しては親不孝の結果として厳しい罰が与えられる。そして「親の言う事を聞いたため出世する」など物語の底流には親不幸をすると悪い報いがあり、孝行をすると良い報いがあるという思想が窺われる。

タイプCのモチーフ4からは、猿を殺した後、家には帰らずに新たな物語が展開する。これはヨーロッパに特徴的な幸せな結婚に結びつける動きととらえることができる。しかし、この物語の場合、Cの話は少なく、タイプA、Bのモチーフ4で見てきたように、猿を殺すという1つの仕事を成し終えた後、「爺のいる家に帰る」という結末が一般的である。

V、なぜ、猿は殺されなければならなかったのか

ヨーロッパの異類婚の結末のように、この物語はいわゆる異類である夫と結婚して幸せになるという昔話ではない。現在の女性がこの物語を読むとき、主人公の娘が猿を殺してしまう残酷さに驚いてしまう。この昔話の中心となるテーマは何なのだろうか。小澤(1994)は文芸学の立場から「猿婿入」について以下のように述べる。「猿のほうが善良で、末娘のほうが冷酷な計略家であるにもかかわらず、この終わり方を「めでたし」と感ずるのは、ただ一点、普通の動物としての猿と結婚することへの嫌悪感なのではあるまいか。それはごく日常的感情である。」と指摘する。小澤の指摘のように、その理由が「普通の動物としての猿と結婚することへの嫌悪感」であるかの検討は後述するが、この物語において、パートナーとなる猿を殺す必要性があったことは確かである。

さらに小澤(1994)によると、ヨーロッパのメルヘンは「人間の一生のプロセスとして、異性のパートナーを獲得するという人間世界内での結末」に関心を持つ「人生論的物語」であるのに対し、「日本の昔話は、自然のなかでの人間の存在に関わる物語を語っている、いわば存在論的物語」であるとし、日本の昔話は「人間とそれをとりまく自然との緊張関係、そしてその緊張した関係のなかで人間がどうやって自らの存在を守っていくか」を描いているという。小澤は日本の昔話は人間と自然との関係の在り方が語られており、ヨーロッパの昔話とは全く異なる次元を表現した物語であると述べる。

また、日本の異類婚の場合、異類の性別に関係なく結婚が持続しない結末は同じである。しかし、異類が女性の場合その正体を夫に知られてしまっても、異類である女房は去っていくだけで、夫はそれ以上の追求をしない。それに対して、「猿婿入」のようにパートナーが男性の場合、そのパートナーを殺害することについて、小澤(1994)は「再び来ることを防ぐため」と述べる。「単に追放に留まらず、必ず殺害しなければ、その後の安心が獲得できないと感じている」からだという。つまり、殺してしまわなければ、こちらの命が脅かされる存在だということになる。人間にとって、それほどまでに驚異的な存在であるということになる。たとえ、昔話の物語表現ではパートナーが善良に

見える存在でも、殺害しないとこちらの存在が脅かされるのである。そこにあるのは、小澤が先に述べたような単なる「普通の動物としての猿と結婚することへの嫌悪感」以上の「自己の存在を脅かす恐怖感」であると考えることができよう。それゆえに猿を殺さざるを得なかったのである。

VI、結婚成就の阻止

さらに、猿が殺されるゆえんについての考察を進めたい。ここでは、ヨーロッパのメルヘンと比較しつつ、異類婚である猿という存在について考察する。前章で日本の昔話とヨーロッパの昔話の語られるテーマの違いについての小澤の説を紹介したが、異類婚としては同じ分類に入る昔話がある。

グリムメルヘンの「歌ってはねる、ひばり」は、夫のライオンは夜になると魔法が解けて人間になる、いわゆる異類婚である。物語の発端は、父が、3番目の娘の望んだ「歌ってはねる、ひばり」を手に入れようとして、その持ち主の動物であるライオンと、家に帰って最初に出会うものをライオンに与える約束をすることから始まる。約束するまでの事情は異なるが、父と動物との約束によって、主人公の娘が動物の元に行く点は「猿婿入」と共通している。グリムメルヘンでも、日本の昔話でも、物語の出だしは同じであるといえよう。つまり、父の起こしたことが原因となって、女性主人公の物語が展開するのである。しかも二人の父の様子はよく似ている。どちらの父も善良ではあるが、自分がまねいてしまった困難を自分の力で解決できず、娘にゆだねるのである。そして、どちらの娘も父の困っている様子を見て積極的に動物の元に行こうとする。そこに、父の問題を娘が引き受ける父娘関係の在り方が窺われる。しかし、その後の展開は異なる。

グリムメルヘンでは、動物の元にやって来た娘は親切に迎えられ城に案内される。そして、夜になるとライオンは美しい男の人になり、婚礼が華やかに行なわれ、二人は一緒に楽しく暮らす。この話のように、グリムに登場する動物婚は、本来人間であるが、魔法をかけられて動物になっている点が、日本の動物婚と全く異なる点である。日本の動物婚は、人間の姿を取る場合もあるが、本来は動物である。小澤は、この日本の異類婚の特徴を、グリムメルヘンの「蛙の王様」と

比較して、全く逆の構造をなすと論じている（小澤、1983）。つまり、グリムの動物婿は異類ではなく、人間が一時的に動物になったものであり、グリムの結婚は異類、すなわち異質なものととの結婚ではないのである。魔法から救済される必要はあるが、娘と同質な存在であるがゆえに結婚が成就できたと考えることができる。

「猿婿入」においても、関（1978）のあげている類話「途中で水を飲んで立派な若者になり、二人で帰る」のように夫が娘と同質な存在となった場合結婚は可能であるが、そうでない場合は難しい。人間ではないという猿のもつ異質性が娘との結婚を不可能にしているのである。結婚とは異質なものを同質化する作用をもつと思われる。つまり結婚によって、グリメルヘンのように動物を人間へと同化する作用がある一方、人間を動物へと同化する作用もあるのではないか。つまり、動物が人間になるのではなく娘が動物になってしまう可能性もあるわけである。これは異類婿によらず、異類女房においてもあるはずであるが、その同化する力は男性の方が強い。たとえば、蛇の子を宿す「蛇婿入り一針糸型」や「蛇婿入り一立ち聞き型」のように、異類婿と人間との間に生れる子どもは動物の姿をしていることが多いのに対し異類女房と人間との間に生れる子どもは不思議な力を持つこともあるが人間の姿をしている（稲田、1988）。もっと直接的な形では、前述した「蛇婿入り一娘変身型」がある。蛇に嫁入りし里帰りした娘は、親に寝姿を見るなというが、蛇になった姿を見られて去っていく（稲田、1988）。「猿婿入」の類話にそれに近い話がある。「娘が嫁入りした3年目の日に猿と二人で訪ねてくる。娘は人間性を失い身体にも毛が生えたので家には帰れないと言って去る。（関、1978）」二つの話ともに、人間であった娘が嫁入りによって動物になってしまい、娘が人間の世界から離れる結末になる。動物が男性の場合、女性の場合より、人間を動物に取り込んでしまう力が強いといえよう。しかも、動物になってしまった娘は異類女房のように人間の世界から消えねばならない。人間である娘が人間の世界に居続けることができない。人間の女性にとって、それはあまりに悲しい出来事である。それゆえにこそ、娘は男性としての猿を完全に亡き者にする必要があったのではないか。「自分の存在を脅かす恐怖」とは、人間ではなくなる恐怖、つきつめれば、

自分が自分でなくなる恐怖である。

以上のように、日本の昔話「猿婿入」は、同じ異類婿の話でも、魔法が解けて動物が人間となり同質の結婚が成就されるグリメルヘンとは全く異なる昔話であることが分かる。グリメルヘンのテーマが成就されるべき結婚であるとしたら、「猿婿入」は結婚成就の阻止がテーマといえる。

Ⅶ、怪物退治

少し視点を変えて、この昔話を異類の男性が人間の女性を花嫁に要求する話ととらえて考察してみたい。この話に登場する猿は、物語の筋からみると、嫁のことを疑わずに何でも言う事を聞く善良な夫として描かれている。そのため、この話を聞く者は猿への同情心を抱き、善良な猿を殺す娘を非難する。しかし、この善良さは娘が嫁に来るという前提でのものであり、爺が約束を破り娘が嫁に行かないとなれば、猿は何をしていたかわからない。おそらく爺はこの事をよくわかっていたからこそ、断られるのを承知で爺は3人の娘に嫁に行くことを頼んだのである。そのように考えると、発端のところで初めに言い出したのが爺であったとしても、対等の約束から生じた嫁入りとは考えにくい。むしろ、いくつかの類話にみられたように力の強い異類の要求に従わざる得ない人身御供に近いものがあつたのではないだろうか。そのように考えるなら、この猿は人の言う事を聞く善良な動物ではなく、言う事を聞かなかつたら人間にどんな危害を加えるかも分からない超自然的存在であるといえる。

このような超自然的存在を悪ととらえ、悪そのものを排除したいと思うことは娘側からすれば当然のことだと思われる（Jacob, M. et al., 1978）。これに繋がる話として、稲田（1988）のあげているタイプ275「猿神退治」がある。旅の六部が、村で毎年娘を人身御供に捧げるとい話を聞き、娘の身代わりに長持ちに入り、現れた猿の怪物を犬の援助を得て退治する。あるいは、狩人が鉄砲で怪物を退治する。この話は稲田のタイプでは、「厄難克服」の中に挙げられている。これは一人の勇者が怪物を退治し生け贄にされる女性を救う話である。ヨーロッパメルヘンで最もよく知られた怪物退治の話型であり、古くはペルセウスの伝説などがあり、「竜退治」の話とされる（稲田ら、1994）。「猿

婿入」の話も、娘を要求した怪物の猿を退治したととらえれば、「猿神退治」と同じ範疇に属すると考えることができる。「猿婿入」の類話（関、1978）では、「猿が食物を取りに出た留守に百姓の父がやって来て、鉄砲に弾をこめて待っている。猿は人臭いといってもどり、炉で背をあぶっている。娘が外に出ると、父が鉄砲で猿を撃ち殺す。」と父が猿を退治する話となっているものがある。この「猿婿入」を、「猿を退治する」話と理解することで、V章から考察してきた「なぜ、猿は殺されなければならなかったのか」が、ようやく納得できるようになる。

次に退治した主体について考えてみたい。前述した「猿神退治」に出てくる怪物を退治する勇者は六分や狩人であり、他の話でも王子、若者などさまざまであるが、すべて男性であり、その男性が怪物を殺し、娘を救う。そして話によっては、救った娘と結婚するいわゆる英雄物語となる。怪物に生け贄にされた娘側からすると、英雄という救い主が現れることによって救い出され、その男性と結婚をする幸福な結末のヒロインとなるが、自分ではどうすることもできず、待つだけの受け身な存在として描かれている。それに対し「猿婿入」では、上述した類話を除き、怪物を退治するための男性は登場しない。生け贄（嫁）となる娘自身が、怪物（猿）を退治する。つまり、怪物を退治する主体が娘であるところが、この昔話の大きな特徴なのである。犠牲になる女性が誰の力も借りずに怪物を退治するという偉業を達成するのである。従来から馴染みのある英雄に救い出されるヒロイン像とは全くの違がある。女性の視点からみれば、この物話は女性の英雄物語である。

VIII、英雄としての女性

怪物の嫁になる娘自身が怪物を退治する話は、この「猿婿入」の他に「蛇婿入」がある。このような女性主人公が活躍する話は日本の昔話に独特である。「蛇婿入」の話については、織田（1993）と山口（2009）がユング派分析家の立場から分析を行なっている。内容的にはかなり通じるものがあると思われるので、二人の考えも踏まえながら、「猿婿入」の3番目の娘について、この娘の行為がどのような状況から生じてきたのか考えてみたい。

この物語では、父と娘との関係が語られる。娘は、爺が猿と交わした約束を果たすために、嫁入りを承知する。「娘の親孝行だから」という言葉からもわかるように、父娘の結びつきは強く河合（1982）のいう父娘結合の段階である。また、約束がテーマになっている点からも父性が強調されているようにみえる。母についてはほとんど語られず、母性不在といえる。この状況は、ノイマン（Neumann, E., 1953）の考える女性の意識の発達の「父権的ウロボロスの侵入」の段階にあたると思われる。ノイマンの述べる母娘結合を表わす「自己保存の段階」の次の段階である。この段階において、母娘の結びつきは弱まり、父娘の結びつきが強調して表現される。この始まりの状況は、この物語の展開が次の発達段階への移行を表現する物語であることを暗示している。

この次の段階としてノイマンが挙げているのは、「父権的ウロボロスからの解放」であり、「男性的な英雄が囚われの処女を竜から救い出す」形をとる。前述してきたようないわゆる「竜退治」の物語がこれにあたる。それに対し、織田（1993）は、新しい視点による女性の心の発達仮説を提唱し、「娘自身によるウロボロスの対決の段階」として、「蛇婿入」の物語を呈示している。そして、「母親的、父親的そして異性的で非個人的なウロボロスと対決する。娘がウロボロスを殺害することによって、娘の自我も内なる異性も、個人としての人間化を進む」と説明する。

また、ノイマン（Neumann, E., 1953）は、女性が父権的ウロボロスから解放されるためには先にあげたように男性としての英雄に依存すると述べている一方、こうも述べている。「個性化過程のただなかにある」女性にとっては、「彼女は内面的な発達のなかで、みずから光の英雄として、巻きつく竜から自分自身を解放しなければならない。」と、女性みずからが英雄となって竜から解放されること、すなわち竜退治を行なう必要性のあることを述べている。

これら二人の指摘は、「猿婿入」の娘にも当てはまる。猿との対決は、父権的ウロボロスとの対決といっていからである。二人の指摘はどちらも、女性の心の発達の1つの段階として、「猿婿入」の娘の行なった英雄的行為の意義を示唆している。

確かに「猿婿入」の娘は、ノイマンの主張する「英雄によるウロボロスの解放」を待つ「囚われの処女」

とは明らかに異なる。というのは、この娘は救われるのを受動的に待つ女性ではないからである。この段階に当てはまるとされるグリメルヘンの「白雪姫」「いばら姫」などより、意識性を発達させた女性である。ノイマンが「個性化過程のただなかにある」女性と述べた点に注目したい。ここでいう意識性とは、自覚的主体的な女性の意識である。「猿婿入」の娘は、他者に依存したり、いわんや状況に流されてこのような行動をとったのではない。意識的、主体的に自分の意志としてこのような行動をとったのである。英雄として行なわれたこの行為の奥に、強固な女性の意志があったと考えることができる。

このような女性が生まれる前提として、ここで示された父娘関係の在り方が意味を持つと筆者は考える。再度この物語のはじまりの状況を見てみたい。女性が母娘結合の中にいる時、娘は母の腕の中で安心感に包まれている。この安心感は基本的信頼感を得る上で必要なものであるが、そこに留まるとき、個人としての娘の成長はない。「猿婿入」の3番目の娘は母との関係を離れ、自らの道（個性化）を歩み出している。そして、父と娘の関係が表現される。ここで登場する父は猿と約束をするなど、父性の側面を持ちつつも、その約束を自分で解決できない弱い父性として表現されている。この父性の在り方は、娘との関係性の中で父の弱さが相対的に表現されているものと筆者は考える。つまり、たとえばヨーロッパメルヘン「魔法をかけられた姫」(Jacob, M. et al., 1978) にみられるような父娘関係、すなわち父が娘を支配し、娘の自由を奪う強い父性とは違い、この父と娘との関係において、娘が父に対して自由に自分の言いたいことが言える関係を表わしていると思うのである。もし父性の強い父なら、グリメルヘンの「つぐみの髭の王さま」のように有無を言わせず、娘を猿の嫁にしてしまうだろう(河合、1977)。しかし、この父はそれをせず、3人の娘に相談し、頼んだのである。3番目の娘だけでなく、1番目の娘も2番目の娘も自分の意見を自由に言える関係にある。それゆえ、きっぱり断わることができたのである。この父は、娘を力で支配せず、自分の娘を一個の独立した人間として尊重し、娘の意見をきくことができるのである。このような父娘の関係を肯定的に受け止めることができる場合、3番目の娘のように、自分の主体性、ひいては行動力を育むことができる

考える。それとともに、その父を尊重し大切に思う気持ちを持つことができたと思われる。その気持ちが英雄的行為に繋がったと思う。一方、娘の主体性を重んじる父はややもすれば、力のない頼りない父として否定的に受け取られることもある。そして、父をそのように受け取った場合、この二人の姉のように父を軽んじる高慢な態度に出てしまう。本来この二人の姉には強い父性が必要であったのだが。

Ⅸ、女性の英雄行為

娘が猿をどのように殺害したかについて考えてみたい。その方法には、男性の英雄行為とは全く異なる特徴が見られる。「猿婿入」の類話の父が鉄砲で猿を殺したように、男性の英雄は剣などの武器を持って、怪物(竜)に直接戦いを挑む。「猿婿入」の類話でみてきたように、男性の英雄が行なうやり方で、猿を殺すことはない。幾つかのバリエーションはあるが、きわめて独特の殺し方である。

猿を死に至らしめる方法は、猿が川や池に落ちて溺れることである。その時、娘が猿を突き落とすなど直接手を下すのではなく、間接的に猿が落ちて溺れるように仕向けるのである。かんざしを川に落して取ってほしいと頼んだり、長い草履を履かせて端を踏んだり、桜の花がほしいといって桜の木に登らせたりする。そして、溺れてしまうことを確かなものにするために壺や瓶、臼を背負わせる。娘の要求や行為そのものは不可解ではあるが、そこに直接の殺意を読み取ることは難しい。夫である猿は微塵も疑わず、嫁の言うことだからと素直に従う。つまり、娘は殺意を隠したまま、うまく猿をだまして策略にかけるのである。男性のように力で対決せず、はかりごとをするといういわば機知を使った対決方法といってよい。それは力で直接男性と対決してもかなわない女性の知恵かもしれない。

さて、ここで猿を殺害するために重要な役目を果たした壺、瓶について一言触れておきたい。壺や瓶はいわゆる女性性の象徴とされる。その女性性の象徴を使って、間接的な形ではあるが、男性を殺す武器としたことが意味深い。このことは、男性と同じ武器を手に入れなくても、女性は自らの内なるものである女性的なもので、自分の身を守ることができることを教えてくれる。この昔話と対照的なのが、グリムの「つぐ

みの髭の王さま」である。この話では、姫が市場で売っていた壺や小鉢を馬に乗った男性が粉々に壊してしまう。この場合は男性の侵入によって女性が大切にすべき女性的なものがつぶされてしまう、男性的なものの妻まじさを物語る（河合、1977）。織田は「蛇婿入」の殺害の武器として女性を守った縫針とグリムの「いばらひめ」の姫自身を死（眠り）に至らしめた錘について、同じ針が女性にもたらす違いについて論じている（織田、1993）。ここでも同様なことが言えるのではないかと思う。針と壺の違いはあれ、象徴するものは、同じく女性的なものである。日本の昔話は、女性的なものが女性を守る術となっているが、グリムの話では、男性によって女性的なものが壊されたり、女性的なものが女性を傷つけたりする。この違いを織田は二人の女性の生き方の違いではないかと述べているが、それと同時にそれぞれの文化の中で生み出された女性の在り方の違いでもあると筆者は考える。父性の強い西洋では男性から見た女性の価値が尊重されるが、日本では意識の奥底ではそのような価値観から自由でいることができ、女性そのものの価値を大切にしていけるのではないかと考える。それゆえ、男性に救われるヒロインでもなく、かつ男性と同一化した英雄でもなく、女性が女性としての英雄になれるのである。

この異類である夫を殺す行為について、織田（1993）は女性自身が持っている怒り、攻撃性によるものであるとし、「意識化や攻撃性が男性的なものとしての借り物ではなく、本体の女性性に根ざしたものである」と主張する。この攻撃性を意識的に発揮することによって、夫となる異類（この場合は蛇）を殺害することができたとする。これに対し、筆者はこの行為の根底にあるものは女性の意志であると考え。というのは、この行為は、怒りという感情に任せた行為ではなく、周到に意図されて行なわれたものだと思うからである。確かに、猿を殺すという行為は積極的に立ち向かう態度であり、このことを攻撃性ということはできる。しかし、爺から話を聞いてすぐ嫁入りを承諾し用意するものを頼んだことからこの時点ですでに娘は猿を殺すもくろみであったことが分かる。誰にも言わずに、一人で計画し、実行に移すためには、「自分が猿を殺さなければならない」という使命感といってもよい強い意志がないと不可能である。この意志を持ち続けることによって、織田のいう女性自身の攻撃性を発

揮できたと考える。そこには、殺害という悪の部分をも自分で引き受ける覚悟が存在する。娘は誰も頼りにせず、猿を殺すというすべての責任を一人で背負う。この強い意志は女性自身の内なるものの支えによって可能になったと思われる。外に対して黙しつつ、自分の内なるものと対話する。それは女性の心の中に住む知恵といってよいかもしれない。その内なる声に従うことによって、男性的と思える殺害行為を女性的なやり方で成し遂げたのである。

X、もとに戻る

猿の殺害後、さらに物語を展開するタイプとして、「猿婿入り—火焚き娘型」がある。それと同じ展開を持つものとして、「蛇婿入り—姥皮型」がある。この話は、家には帰らず、婆からもらった姥皮を被って長者の家で奉公をし、その長者の息子に見初められ、嫁になり幸せに暮らしたというものである。織田（1993）と山口（2009）はともに、このタイプの話进行分析している。それは、女性の成長のプロセスとして、親から離れ異性と結婚するということがより高い発達段階を表わすという考えからである。昔話の結婚という結末が、小澤の述べる人生論としての1つの完成を示すという考えは、筆者も同意見である。このような心の動きを表わす日本の昔話が存在すること自体、筆者も意義深いと考えている。

しかし、この物語では、その様な展開をもつ物語がある一方、「殺害後、父の元に帰る」という結末を持つ物語があることに注目したい。織田（1993）は、「蛇婿入」において、「末娘が父と姉たちの家を離れて異性との関係を成立させる話を欠いている」という類話があることを指摘しつつも、それに対しては「女性自身によるウロボロスとの対決が前半の部分で中断する」とのみ述べ、それ以上の分析は行っていない。しかし、「家に帰る」という結末をもった昔話が残されていることは、その結末に意味があったと考えることができる。この終わり方を意味ある終わり方であると理解して、その意味を考えることも必要ではないだろうか。

筆者がここで取り上げた「猿婿入」の場合、織田と山口が分析の対象としている「姥皮」と同じタイプである「火焚き娘型」より、殺害後「家に帰る」という

結末の方があきらかに多い。つまり、この終わり方がこの昔話にとっての自然な終わり方なのである。

主人公は英雄的行為を行い、家に帰る。つまり、話の始まりの元の状態に戻る。これは、河合（1982）が「無が生じた」と積極的に評価した日本の昔話の特徴に通じるものである。河合は、「1つの昔話が無を語るために存在している」ととらえ、さらに昔話とは、「自己とは何ぞや」という問いに対する解釈を提供するものだ」と述べる。西洋の昔話同様「火焚き娘型」は元の状態から発展して結婚に至るといふ結末はより高い成長段階に達する直線の上昇イメージがあるのに対し、この話は初めに戻る循環する円イメージがある。この二つのイメージに優劣はなく、あるのは在り方の違いである。前者の様な在り方もあれば、後者の様な在り方もあり、この昔話は後者の在り方を是としている。この物語を元の状態に戻ったと否定的にとらえずに、河合の主張するように、「無が生じた」と積極的にとらえて考えてみたい。

それでは、この話においてどのような無、自己が語られているのだろうか。「元に戻る」ことは同じことをくり返すと言うことができる。世の中に出ていき新たなものを獲得するという在り方ではなく、元あるところで今あるものを大切にしていくなり方である。毎日変わらない日々の暮らしは単調に見えるが、その日々のくり返しの中にこそ、かけがえのないものがあることをこの昔話は語っていると筆者は考える。

3番目の娘は、このことをよく理解していたのではないだろうか。だから、非日常から現れた猿を殺害し、日常である爺の元に戻っていった。爺と暮らす日常をかけがえのないものとし、その日常を守るために英雄的行為を行なったのである。女性の英雄的行為というのは、何かを破壊し獲得するためのものではなく、今ある何かを守るために行なうものであるかもしれない。

この昔話において、確かに猿は退治されなければならない怪物あるいはノイマンなどが述べるようにそこから解放されなければならない父権的ウロボロスの存在であった。しかし、爺である父について、筆者は織田とは異なる見解を持つ。なぜ父の元に帰るのか。これは父権的ウロボロスへの退行や父の支配下に戻ることを意味しない。先の章で述べたように、この二人の関係はいわゆる父に支配され依存する父娘関係ではな

く、父に対して主体的に自分を表現できる自由な関係にある。自由な関係ゆえに、「火焚き娘型」のように、父との関係をきっぱり切捨てて新たな道を進んでいくのも、1つの個性化の道であるが、父親との関係に留まり、その関係を完成させるために家に戻ることも1つの個性化の道ではないかと考える。

前述したように、この物語には、親不孝をすると悪い報いがあり、孝行をするとよい報いがあるという思想が流れている。ここでは親孝行という言葉で表現されているが、父と娘の関係の在り方が述べられていると筆者は考える。すなわち、あるべき父と娘の関係は、父から離れることではなく、父と共にあることであり、その在り方は自由な関係にありながらも、父を敬い大切にすることである。このあるべき関係は、なかなか難しい。自由な関係にあることは、ややもすれば姉たちのように父を軽んずる自分勝手な行為になってしまうことが多いからである。しかし、この姉たちの行為に対し、家を追い出す、鼠になるというかなり厳しい罰が与えられる。これは父を軽んずる行為が人間としていかに悪いことであるかを語る一方、逆にそのような戒めが必要であったことは、このような父を敬い大切にすることがいかに難しいことであるかをも語っている。3番目の娘は、この難しい関係を全うするために、家に戻ったのである。その関係の完成の後に、父の元での結婚がある。父の元に帰るといふ外的には何も変わらない中に、父との関係を完成させるという精神の深まりがあると筆者は考える。

Ⅺ、終わりに

ノイマン（Neumann, E., 1953）は、個性化過程の途上にいる女性の場合の父権的ウロボロスの解放の道をもう一つ述べている。それは、「この竜を愛しつつ、しかも意識的な献身を捧げ、あえて死の婚礼を受けることによって、この死の婚礼のなかから一竜とあい携えて一変容した姿で現われ出なければならない。」というものである。これはまさに前述したグリムメルヘン「歌ってはねる、ひばり」の展開である。「猿婿入」と同様な父娘関係の中にいたこの娘は、結婚後動物婿である夫を探してどこまでも旅をし、超自然的な存在の援助を得て、やっとう人間としての夫を見つけ出し、再会する（Kast, V., 1983）。動物婿の夫との関わり方

は、「猿婿入」の娘とは全く正反対ながら、「どこまでも夫を探しに行く」というこの娘のもつ強い意志は「猿婿入」の娘と同じである。「猿婿入」の娘の行為を非難する現在の女性たちは、動物婿と関わり分かりあえることを望んでいる。しかし、それは生半可な意志では不可能であることを、「歌ってはねる、ひばり」の物語が語っている。現代の日本の女性たちが、異類である男性に出会うとき、どちらの関わり方を選ぶにせよ、覚悟をもって関わるができるために、自分の意識を高め、自らの意志を持たねばならない。そのために、まず、自分自身の内なるものを信じて、その声に従う所から始めたい。

文献

- 稲田浩二 (1988) 『演習版・日本昔話タイプ・インデックス』 同朋社
- 稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久編 (1994) 『〔縮刷版〕日本昔話事典』 弘文堂
- Jacoby, M., Kast, V. Riedel, I. (1978) "Das Böse im Märchen" Bonz Verlag GmbH 山中康裕監訳 (2002) 『悪とメルヘン』 新曜社
- Kast, V. (1983) "Mann und Frau im Märchen—Eine psychologische Deutung—" Walter-Verlag A. G. 松代洋一訳 (1985) 『おとぎ話にみる男と女—ユング心理学の視点から—』 新曜社
- 河合隼雄 (1977) 『昔話の深層』 福音館書店
- 河合隼雄 (1982) 『昔話と日本人の心』 岩波書店
- Neumann, E. (1953) "Zur Psychologie des Weiblichen", Rascher&Cie.. 松代洋一・鎌田輝男訳 (1980) 『女性の深層』 紀伊國屋書店
- 織田尚生 (1993) 『昔話と夢分析—自分を生きる女性たち—』 創元社
- 小澤俊夫 (1983) 異類婚姻譚にみられる動物の姿 日本民俗学 146 1-14
- 小澤俊夫 (1994) 『昔話のコスモロジー—ひとと動物との婚姻譚—』 講談社
- 小澤俊夫 (2005) 特集「猿婿」の文法 子どもと昔話 24 11-16
- 関敬吾編 (1956) 『こぶとり爺さん・かちかち山—日本の昔ばなし (I) —』 岩波書店
- 関敬吾 (1978) 『日本昔話大成第2巻 本格昔話—』

角川書店

高橋健二訳 (1976) 『グリム童話全集Ⅱ』 小学館

山口素子 (2009) 『山姥、山を降りる—現代に棲まう昔話—』 新曜社

